

スキャンダル

柄は〇・二%の「斥だ。田越の中絶株から逃げ出したもった。これは全体の平均値。相対的に優秀なパフォーマンスを上げ続けるファンドは存在する。東京・日本橋人形町に拠点をおくフィノウェイク・インベストメントは昨秋設立したばかりの新興勢。みずほ証券で株式営業を務めた藤沢雅夫氏(47)と総合電機の子会社アナリストだった若林秀樹氏(46)が中心となり設立。同社の「Hadoh(仮称)ファンド」はユーリカハンジのウェイクとは対極の徹底した

で、しかもその中身は毎日組み替える。いくら小所帯でも、実績を出せば投資家に評価されるのがこの業界の「ルール」と山下氏は話す。

和製ヘッジファンド台頭

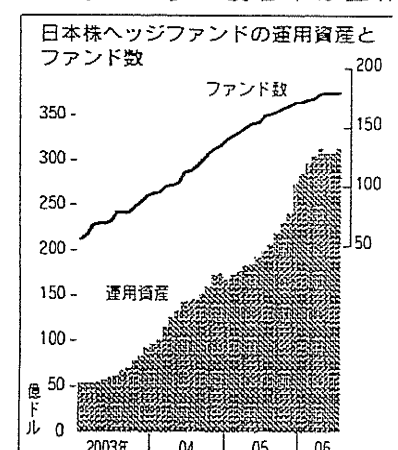
規制論よそにどぶ板営業

キリシヤ語に「アマラントス」という言葉がある。これを語源とする英語は「アマラントス」で、永久に散らぬ伝説上の花のこと。皮肉にも不死の象徴をその社名に選んだ米大手ヘッジファンドのアマラントス・アドバイザーズが天然ガス取引の失敗により六十億(約七千億円)以上の巨額損失を被ったことが先週明らかになり、米ヘッジファンド業界に激震が走った。

「騙の甘い会社だったからね」とは取引のあった米アマムプロローカーの弁。そのやら科擧(すさん)なリスク管理では以前から有名なファンドだったようだ。冬の場の天然ガスの価格上昇に賭ける三十二歳の若手トレーダー、ブライアン・ハンター氏に百億規模で相場を張ることを許していたというのだが、なるほど尋常ではない。

日本を拠点に運用する「和製ヘッジファンド」は百社近くまで増えたという。今でも「平均して月に二三人は独立する人が出ている」(あるプライムブローカー担当者)と増殖中だ。例えば、運用会社や証券会社を「腕を磨いた優秀な人材を呼び付ける新たな「磁場」。安易な規制論で日本の金融業界で進行する

案の定、アマラントスの一件を機に米国では「ワイルド」な監視をしない「種をまく」を十分に規制論が花盛り。日本のあるヘッジファンド担当者は「村上ファンド事件の余波が収まりつつあったのに、日本でも「強誘導」が再燃するのではと懸念する。



注)ユーリカハンジ調べ。対象は日本株ロング・ショートファン

「トップダウン型」の運用戦略をやる。同社の「スタックス」は先週のハンギングで三位に顔を出す成績上位の常連ファンドだ。同社はそれぞれ約百銘柄ずつの銘柄を同金額だけ買い持ち(ロング)と売り持ち(ショート)にするマーケット・ニューtral型。ドイツ証券出身の山下隆也社長(46)は「予想のつかない相場全体の方向性には絶対に関与しない」と運用哲学を語る。買入るのは、時価総額の規模もすべてファンドに投じて、全知全能をかけたマーケット戦略の中を到達する醍醐味(たいてい)があるのだという。あんな相場つきがどう稼いだらいいのか、スプレッドを最小限に抑えるため

(川崎隆)